

Title	博士になつた飯島忠夫氏
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1929), 10(106): 91-91
Issue Date	1929-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161503
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

事になる。その年代は潮汐摩擦が最も都合よく働いたとして 53,000,000 年となる。これは最小限の年数であつて、實際は其の 2, 3, ……倍やらない。かの「見しまゝに姿も影も變らねば、月ぞ都の形見なりける」の歌を宇宙進化論的に考へて見るのさ面白い。W.H. Pickering (1907年) が“月は地球から分離したもので地球の外層を全く同體のもので、太平洋は月のできごである”といふ様なことをいつてゐるのさよく符合してゐるではないか？　さまれ天空に限りなき數多の星の中にはニツダマの連星が澤山あるが、之らの殊にその距離の接近せるものについてその生成も亦潮汐進化論から説明されるものである。

かく考へ來つて月に向つて見るがいい。あのものやわらかい光は、宇宙眞理の扉に輝く門燈であり、その盈朧を運行は宇宙行進曲を如實に物語つて居るものである事を益々淨く感ずるであらう。そして眞理に忠實な人達の努力を読みこつて見れば、月に關する物語りはその止るところを知らないものである。

博士になつた飯島忠夫氏

去る十一月四日付を以つて文學博士が一名生れた。それは學習院中等科長飯島忠夫氏である。

氏は明治八年長野縣松代町に生れ、同地の小學校を卒業後、母校に雇はれて教鞭を執る傍ら、同地の藏書家として知られた長谷川照道氏に國漢文を學び、三十四年上京、一躍錦城中學の五年生に編入、翌年卒業、直ちに臨時お茶の水第一教員養成所に入り、卒業後は學習院教授として中等科の國漢文を擔任、大正十一年高等學校高等科教員試験に合格、現在に至つたといふ處に稀に見る苦學力行の士である。

氏の研究論文は「支那古代史論」で、支那古代の天文曆法を研究したもので、儒教の哲學、倫理、政治學が天文學、曆法の學を互に提携して占星的色彩を具有する關係や、支那古代の天文曆法を現時の天文學の智識に照して研究したもので、氏の天文曆法の考察は從來の研究より嶄然一頭地を抜いたものであるが、氏の結論については、早くから京大の新城博士との間に論争の絶えなかつたものである。